海と山の「楽園」蒲江に生きる

風と潮と天まかせ　海業で地域を元気に　マーコ姉（ねえ）の物語

有限会社丸二水産

橋本正恵さんが20歳の時一人で立ち上げた「橋本正恵商店」が前身。魚介類の養殖・加工・販売のほか、食堂、旅館・民宿の経営、さまざまな漁業体験を提供している。現在の社長は子ども。淡水魚の海水養殖など常に新しい養殖の研究にチャレンジするのは次男、三男は海業体験・旅館民宿の切り盛りをする。一家で海と関わり地域で生きることを喜びとする。

有限会社丸二水産取締役

橋本（はしもと）　正恵（まさえ）氏

略歴　大分県佐伯市蒲江大字西野浦出身。昭和45年、橋本正恵商店を立ち上げる。昭和49年に丸二水産を設立。全国へ販路を拡大し新しいアイディアで事業を拡大。平成2年に「海の体験民宿 まるに丸」を始める。平成8年に蒲江町観光協会会長就任。平成18年、かまえブルーツーリズム研究会を立ち上げ、翌年「体感・学び」の大学「あまべ渡世大学」を開設。地元の魅力の発掘・発信と、自分たちで楽しめる地域づくりを目指して活動を広めている。

年表

19歳
結婚。翌年長男誕生

21歳
橋本正恵商店を立ち上げ、果物や野菜の卸売から魚介類の卸売へ

38歳
全国の女性で初めて定置網の権利を持つ

47歳
蒲江町観光協会会長就任

57歳
かまえブルーツーリズム研究会発足（会長就任）

57歳
平成18年度（第3回）女性のチャレンジ賞受賞

59歳
農林水産省「農林漁家　民宿おかあさん100選」に選ばれる

62歳
日本観光振興協力会長表彰受賞。「大分学研究会」の呼びかけ人となり立ち上げ時副会長に就任

東京から空路1時間半、その後バスを乗り継いで約4時間。緑の山々を抜けてようやく大分県佐伯市蒲江に到着する。豊後水道に面した風光明媚なリアス式海岸に位置し、静かな入江と豊かな漁場に恵まれた入津湾に面した蒲江西野浦は、昭和39年にトンネルができるまで他所に行く交通手段は細い林道と船だけだったという。海はずっと昔から、遠く中国大陸や韓国からも、この地域に様々な人・物・文化をもたらし、独自の文化を豊かに育んできた。

橋本正恵さんは、水産会社の役員、旅館と民宿のおかみさん、地元のブルーツーリズム研究会の理事長職など多忙なお仕事の合間を縫って蒲江の町を案内してくれた。橋本さんはすれ違う地元の方一人一人と明るい笑顔で言葉を交わす。ごくごく自然に、今日の労をねぎらい、明日の段取りを相談する。地元には橋本さんを応援するため自然発生的にできた「マーコ姉（ねえ）応援団」があるというがそれも頷ける感じがする。

困ったら、自分でなんとかするっきゃない。

橋本さんが丸二水産の前身、橋本正恵商店を21歳ではじめたのは自分と生まれたばかりのお子さんとが食べていくためだった。夫は出稼ぎに出たままで生活は火の車。困ったときは、自分で何とかするっきゃない。子育てしながら真珠の珠入れの仕事に早朝から励んで得た資金を元手に軽トラックを購入。地元のミカンを積み込んで佐伯市の市場で売り、今度は野菜を積み込んで村々で販売しながら帰る。やがて地元の魚介類を町の市場に運ぶように。販路を広げるため断崖絶壁の県境の道をトラックで宮崎県へも走った。電話営業で遠方からの注文もとり鹿児島、大阪、東京、東北まで貨物輸送で販売をした。貨物輸送が広まると今度は航空便で1日早く到着する方法で利益を上げた。さらに、大量の魚を一度に運べる「水槽車」を考案し、その後、夫が買った大型トラックを活かすため知恵を絞って考え付いたのが、酸素を送り込みつつ水槽で大量の魚を運ぶ「活魚車」だ。それまでに広めた販路と信頼とで一気に商品を市場に送り込み事業を拡大させた。

豊後水道から入津湾の入り口にある丸二水産は水産物の加工場・出荷場であり、食堂・民宿であり、ご本人も含め3世代で住まわれるご自宅でもある。そして地域を挙げて技や知恵の伝承に取り組む「あまべ渡世大学」の教室でもある。加工場の基礎として海に面して石垣が積まれているがそれは袋にセメントを詰めて重ねたもので、橋本さんのアイディアだ。「40年前、丸二水産を立ち上げた時、女子衆（おなごし）も一緒に皆で積み上げたんよ。みんな仕事があることを喜んで、楽しんで働いてましたよ。」女性でできるこのやり方はその後地域に広まったという。常に困ったら「自分でなんとかやるっきゃない！」溢れんばかりのアイディアウーマンである。

民宿から地元観光協会会長、そしてブルーツーリズムへ

平成2年に始めた民宿「まるに丸」は漁業に観光の要素を掛け合わせ、交流の拠点として、橋本さんが解体される直前の民家を買い取り改造したものだ。その後地元の産業と観光の両方を知る人として平成8年に蒲江町観光協会の会長に就任。ここから公的な立場での橋本さんの活躍が始まる。

この頃橋本さんを力づけたのは平松守彦知事（当時）が始めた「一村一品女にまかせろ100人会」でスピーチしたこと。それが知事に「面白い」と評価され、思いがけないことが自信にもなり、そこで県内各地の地域を愛し活躍する女性たちと出会ったこともその後の励みにもなったという。そして、一緒に丸二水産を育てその場に後押しをしてくれた地元の女子衆への感謝が地元へのさらなる愛着につながったという。

観光協会会長としては、一村一品運動で地元の特産の一つでもあったノジギク（野路菊）の花いっぱい運動の展開や、マリンカルチャーセンターのプールに遊び心でマンボウを入れたところ押し寄せた観光客を「お腹をすかせて帰らせちゃいかん！」と立ち上げた「昼めし部隊」。今や県境を越えた海岸続きの宮崎県延岡市まで一緒になって展開する「伊勢えび海道」（現在は「東九州伊勢えび海道」）も大好評を博した。平成18年には「かまえブルーツーリズム研究会」を発足。人口8千人の町で一千八百人が登録したという。「子どもたちに地元の産業のすべてを伝えたい」「ここで踏ん張って生きていくために自分たちで楽しめる地域づくりを」が目的だ。翌19年には蒲江全体をキャンパスとした「体感・学び」の大学「あまべ渡世大学」を開設。「渡世」とは生き方や生業（なりわい）のことで、メニューには地域の産業の支え手であり仲間でもあるメンバーによる体験講座がずらりと並ぶ。

先人の思いを継ぎ、地域の人がともに生きる、地上の「楽園」を

地元のノジギクの植栽や渡世大学の設立には先人から受け継いだ地域への熱い思いがある。村の人たちが他所へ出稼ぎにいくのでなく、他所から人が来て店が賑わい村が栄えるのが良いと、他所との往来と地元の女子衆の働き場所を得るため創意工夫で旅館を切り盛りしたお祖母様。そのために村を美しい花と美味しい魚で楽園のようなところにしたいとつねづね言っていたという。その思いを、父親が引き継ぎ、今また橋本さんが受け継ぐ。そして子どもたちの世代にも、美しく力強いふるさとを引き継ぎたい。

陰ひなたなく、筏の上で苦楽をともにした女子衆たちがずっと仕事をしながら幸せにくらせる場所にしたいとの熱い思いも今の橋本さんを駆り立てている。年をとっても地域の人が知恵と技を活かして稼ぎながら笑顔で過ごせる場所を蒲江に作ること、それが橋本さんの夢だ。橋本さんの世代を超え受け継がれた楽園の実現に向けた物語は、「九州風景街道」とともに、今も続いている。

（文・高村 静）